様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２５日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１６５２０２２
研究課題名（和文）　宮崎神楽の研究

研究課題名（英文）　Research of Miyazaki Kagura

研究代表者
山田　利博（YAMADA TOSHIHIRO）
宮崎大学・教育文化学部・教授
研究者番号：４０２７４７６６

研究成果の概要（和文）：
(1)350 ほどもある宮崎の神楽のうち、データベース化されたのはただ一つと言っても過言ではなかったこれまでの状況に対し、主要 3 系統 5 つのデータベースが提供できる準備が整った。
(2)そのデータベースに付された字幕解説により、初心者でも神楽の舞の意味を容易に掴めるようになった。
研究成果の概要（英文）：
(1)Although there are about 350 kagura dances in Miyazaki, it is no exaggeration to say that there has been only one database on Miyazaki Kagura dances until now.　However, I am ready to provide five databases on 3 main branches of Miyazaki kagura dances.
(2) By explanatory subtitles added to the databases, even beginners can grasp the meaning of the kagura dances easily.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	0	500,000
２０１０年度	200,000	0	200,000
２０１１年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総　計	800,000	30,000	830,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：神楽・宮崎・データベース

１．研究開始当初の背景

「大方、詩を作り和歌を詠み手を書く輩は、書き留めつれば、末の世までも朽つる事無し。声技の悲しきことは、我が身崩れぬる後、留まることの無きなり。」

言うまでもなく後白河法皇による『梁塵秘抄』口伝集巻第十の末尾であるが、この言葉の通り、形として残らない芸能方面の研究は、同じ文学の分野中でも、すこぶる遅れてきた。

近代になって、ようやく録音・録画技術が普及し、これらの研究も緒についてきたと言えるが、謡曲・歌舞伎等の、言ってみれば中央の芸能に比較すれば、地方文化に根ざした神楽の分野は、ほとんど手つかずと言っても過言ではない。

16 年前、神奈川から赴任してくるまで、私もあまり認識はなかったが、ここ宮崎の神楽は、島根の石見神楽と比肩できるほど、演劇的要素に溢れ、かつ先学の山口保明によれば、およそ 350（『宮崎の神楽』(鉱脈社　2000)と、他県に比較して数も異様に多い。

着任以来私も、毎年の如く現地に取材に行

き、「日南・潮嶽神楽についての考察」(『地域文化研究』Vol.1（2006)、「椎葉・栂尾神楽についての研究」(『宮崎県における地域社会の研究』(2007）等を発表してきたが、言うまでもなくこれらは、文字で書けるものではなく、「記録」というものの重要性を痛感した。

もちろん私も、これまで調査したものは全て録画してあるが、数年前まで記録媒体は、せいぜいデジタル・ビデオテープぐらいしかなかったため、論じようとするシーンを探し出すのが非常に厄介である。この手の研究は、やはり頭出しが容易なハードディスクか、少なくとも DVD に記録することが、最低限必要だと思った。

そこで当面、宮崎の代表的な神楽を、利用の便が良い DVD に記録し、そこに研究者による簡単な舞の解説等を文字で加えることにより、初学者等も簡便に利用できるデータベース的なものを作製することを思いついた次第である。

２．研究の目的

(1)これまでの機材では一度テープに録画した後、DVD に落とすしかなかったが、それにはまた録画時とほぼ同じか、それ以上の時間を要し、あまり現実的な方法とは言えない。宮崎の神楽は一昼夜舞い続け、一つ大体 14、5 時間ほどもかかるものなのである。最近は直接 DVD に書き込むとか、ハードディスクに録画するタイプのカメラも出て来たので、これまでの資料を編集する作業と並行して、今後の記録はそれらの機器に頼るべきと思われる。

(2)こうした発想の下に作られた資料はもちろん既に若干存在する。例えば、2001 年にビクター伝統文化振興財団から出された全４巻のビデオ『高千穂の夜神楽』や、2005 年に紀伊國屋書店から出された全 4 巻の DVD『椎葉神楽～山の民の祈り～』がそれである。しかし、前者はビデオであるから、必要な場面を探しにくいという、先述の欠点を有するし、後者は、さすがに DVD だけあって、使い勝手は良いものの、椎葉神楽の一つである栂尾神楽しか無く、しかも現在は絶版で、入手不可能である。インターネットで検索する限り、宮崎の神楽に関する映像資料はこの２件しか無く、それが両方とも現在は使えないとなると、データベースを自作するしかないことになり、完成した暁には、神楽を研究する者はもちろんのこと、現在の舞手も意味を捉えて舞っている者が少ないので、それらに資することが出来ると予測される。

(3)そこで当面の目標としては、宮崎神楽の主要３地域と言われる、狩猟神楽の椎葉、漁労神楽の日南、山間部にありながらも稲作の要素も強い高千穂神楽の３つのデータベースを、これまでの撮影分の編集も加えて構築し、映像の裏付けのある、宮崎神楽の伝播状況の解析に挑んでみたい。これは今後、最初に述べたような他地域の神楽の影響関係についての研究へと発展し得るものであるし、何よりこうした手法を用いた文学研究はまだなく、新しい文学研究のノウハウを構築する上でも貴重な試みとなると予想される。

(4)加えるに、神楽の盛んな宮崎といえども、実情はどこも、真剣な後継者不足に悩んでおり、今ここで記録しておかなければ、将来絶えてしまう可能性は非常に高い。そういった資料的側面でも、この研究成果は、県民を始めとして、高い需要が期待できるのである。

３．研究の方法

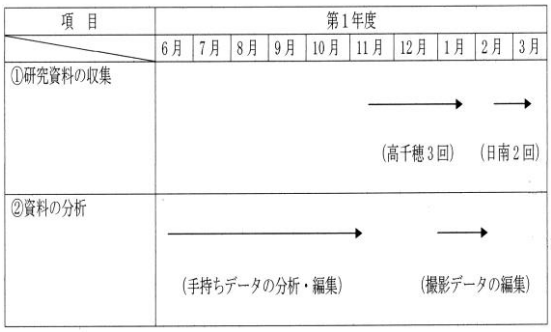
(1)全体の流れ

神楽が行われるのは、一つの集落で年一回、しかも日にちも指定されているので、こちらの都合で行くことはできないし、重複しているところは同年に行くことはできない。その意味では共に冬神楽である高千穂と椎葉は、同年に行くことは難しいが、幸い日南は春神楽であるので、前二者のいずれかと同年に行くことが出来る。ただ、その「春」は比較的早い時期であり、科研費の採用・不採用が決まる時期には既に終了しているので、初年度の始めは、これまで集めたフィルムの再チェック及び編集に当て、そこで不足部分（＝撮影が必要な部分）等を割り出した後、冬からの資料収集に臨むこととする。一年目の訪問地は、これまでのデータの多さ（＝補填部分は少なくてすむと予想される）から高千穂とする。二年目の訪問地である椎葉神楽については、高千穂よりデータの蓄積が少ないため、訪問地域を増やさざるを得ない（因みに、分類としては４つの系統に別れるとのことである（山口保明『宮崎の神楽』および DVD『椎葉神楽～山の民の祈り～』による）が、幸いにして日南神楽は他の二者ほど数がないため（山口の著書に依れば２系統)、初年度末から第二年度最初の調査でほぼ終了し得る。第三年度春のほとんどをデータ分析・編集に当てることが可能と思われる。

(2)第１年

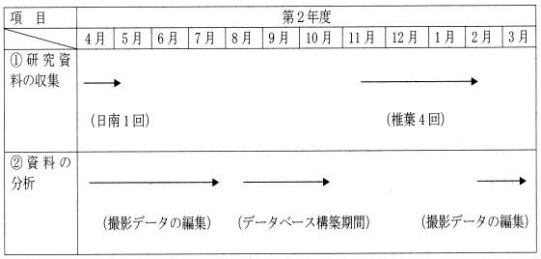
先学に依れば、高千穂神楽は三系統に分類されるので、代表的な地域をそれぞれ一度ずつ、計３度訪問する。「研究の目的」の項でも述べたように、高千穂神楽は足かけ二日にわたって舞われるので、撮影の交代要員として学生を２名ほど、延べ６日間拘束する。日南の方は昼神楽で、かつ１日で終了するので、交代要員は必要としない。一方、手持ちのデ

ータだけでも、延べ40時間分くらいあるので、その分析・編集のためには、編集用パソコン、ソフト等が必要となり、補助の学生を２人ほど、20日間程度雇用し、編集の補助とする。



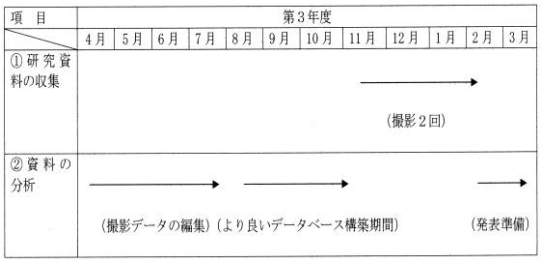
(3)第２年

日南の撮影については、前年度同様、補助は必要ないが、椎葉も足かけ二日にわたる神楽なので、撮影補助の学生が二人、延べ８日必要である。この年度からは撮影データのみの分析・編集となるはずなので、補助の学生は二人必要だが、延べ10日も雇用すれば充分である。



(4)第３年

予定通り進んでいれば、３年目はデータ整理とより良い形でそれを社会に還元できる方法に没頭できるはずであるが、不足が生じた場合を想定して撮影計画を２回入れてある。学生雇用については前年度と同じ。なお、この科研枠では成果の発表は特に義務化されていないようだが、費用を使うのであるから、一応発表は視野に入れておく。



(5)今後

実績報告書にも記載したとおり、データ収集・編集はほぼ終了したが、解説をつけたデータベースの構築は間に合わなかったので、出来るだけ早く成果を発表できるよう努力する。

４．研究成果

(1)350ほどもある宮崎の神楽のうち、ただ一つ(椎葉・栂尾神楽。但し絶版)しかなかったデータベースが、主要３地域(高千穂・椎葉・日南)5 つのデータベースとして提供できる準備が整った。

特にこれまではメディアの制約により、ごく少数の静止画と、文字による解説しかなかったが、神楽は元来舞であるから、必然的に「動き」を伴う。また、一番＝(1曲)最長30分もあるため、そこに含まれる所作も複数に及び、この提示の仕方では自ずと限界があった。

この研究により画期的な何かが明らかになったということはないが、これまで指摘されてきた山間部の神楽の類似は、高千穂神楽と椎葉神楽の比較、それに対する海辺の神楽との相違は、その両者と日南神楽の比較によって、番付及び「舞の所作」の相違として、誰の目にも一望の下に認識できるようになったということは、本研究の一つの意義として認めても良いと思う。

(2)これまでのデータベースは、各番付数秒程度のものであったが、舞のバリエーションごとに見ることが出来、かつ解説により、舞の意味等を独学することも可能となった。

現地に行くと痛切に感じられることだが、実は神楽の舞手達も、自分が表現している舞の意味まで理解して舞っている人は意外に少ない。古典研究の専門家でない以上、これはある意味当然であり、舞の意味を知れば、さらに良い舞が舞えるというものでも勿論ないが、昨今は後継者を育成するという意味合いもあって、現地の学校では神楽の授業を取り入れているところも多々ある。そうした場面では「古典教育」という観点からも、やはり舞の意味まで教えて欲しい。すなわち舞手の教育という面でも、本研究の成果は充分意味あることと思う。

また神楽を見物する側も、単調な舞の繰り返しに、あくびをかみ殺す場面もしばしばある。これなども、一つ一つの所作に意味があるのだと知ることにより大分見方が変わってくるであろう。現に神楽の場で頻繁に回し読みされるこれまでの解説書の姿からもそれは窺え、本研究の成果は、「見る側の予習」としても役に立つ。

要は、せっかく残っていることも、その価

値を知らなくては宝の持ち腐れということであり、本研究の成果はそれを再発見し、さらに未来に繋げていくという意味においても価値あることと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕(計０件)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山田　利博（YAMADA TOSHIHIRO）
宮崎大学・教育文化学部・教授
研究者番号：４０２７４７６６

(2)研究分担者
なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）

研究者番号：